



日時	場所
10月15日 14時30分	立教大学5号館 院生控室 教室

テキスト/テーマ

『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』

編者/著者	出版社	範囲
マルクス	大月書店(国民文庫32)	[7]



後半期 第2回/通算 第76回

ご案内-詳細

今回の範囲である[7]は、ルイボナパルトのクーデタに至るまでの歴史的な事件を、理論的に総括しています。また、ルイボナパルトの第二帝政の分析を通じて、資本の国家の真相を明らかにするための示唆が与えられています。個別적으로는、資本の国家と支配階級（ブルジョアジー）との対立、自営農民の政治的な位置付け、軍隊の役割などの解明に、手がかりを与えています。

人名	割当
窪西 保人・	総て

出欠

出席
 欠席

OK Cancel Replace

『ブリュメール18日』は二月革命(第二共和制の成立)からルイ・ボナパルトのクーデター(第二帝政の成立)までの政治的変動を、階級闘争の発展と関連付けるということによって、解明しようとしています。このような特殊な事件の解明は、現代社会における国家の一般的な位置付けに、そしてまたそれを通じて未来社会へ実践的な道程に光を照らすはずです。

今回の範囲である[7]は、これまでに叙述されてきた第二共和制からルイボナパルトのクーデタに至るまでの歴史的事件を、理論的に総括しています。また、ルイボナパルトの第二帝政の分析を通じて、資本の国家の真相を明らかにするための示唆が与えられています。個別的には、資本の国家と支配階級(ブルジョアジー)との対立、自営農民の政治的な位置付け、軍隊の役割などの解明に、手がかりを与えています。

理論的には、特に資本主義の下での国家の役割(国家の相対的自立性なるもの)との関連で、このテキストは利用されてきました。また、これと関連して、ボナパルティズムが現代にとってどのような意義を持っているのかということが論じられてきました。それらの議論の良し悪しは別にして、マルクス主義の国家論なるものをやっている人たちと議論する際に、この本は基本的な教養をなしています。

当たり前ですが、このテキストには、当時の細かい歴史的事実が書かれているために、なかなか理解するのが厄介です。それに加えて、独り善がりな文体が読者の理解を困難にさせます。マルクスには文学的に表現する能力が全くなかったのですが、困ったことに、彼自身は自分に文才があると考えていたようです。このような困難は何人かで一緒に読めば、少しは軽減されるはずです。

とは言っても、あまり細かい歴史的な事実にこだわることなく、現在の社会状況との関連で、現代的な問題意識で、理論的に読んでいきたいと思えます。

なお、テキストは品切れかもしれません(大学図書館などには必ずあるでしょう)。テキストを入手することができない方は、至急、今井のところまでご連絡ください。できるだけ早急にコピーをお送りいたします(コピー代、郵送料はご本人の負担といたします)。



今後の予定は、――

10月29日(日曜日)

です。予定を立てる際の参考にしてください。



『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』は今回で終わる予定です。今回は次回以降のテキストを選ぶ予定です。今後に取り挙げてほしい――あるいは取り挙げるべき――テキストがありましたら、お教えください。

現在のところ、差し当たって先ず、知的所有権問題についてのテキストを次に取り挙げようという意見が上がっています。この問題について、何かいいテキストがありましたら、ご紹介ください。

